

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Irrigation System in Nong Paman, a Lannathai Village in Northern Thailand

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田辺, 繁治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004625

翌5月22日の底浚えは堰組の各経営耕地と支線用水路にしたがって13組に分割されて朝8時からそれぞれの地点に結集して行なわれ、堰長は Tong Nōng Pāman の近接耕区からオーイ村をへて、ほとんどフェーン街道に近い最末端の他村の耕地にまで足をのばして底浚え作業を監督指導した(図7)。

以上のように、堰普請と底浚えからなる用水普請は、堰長の強力な指導のもとに堰組の組織された共同労働として遂行される。共同労働を組織化する主体は堰組であり、そこには自ずから慣行的秩序が形成され、それは基本的には労働力の供出義務と用材・用具の供出義務からなりたっている。これらの供出義務を怠り、あるいは違反した者に対してはそれぞれ規定された罰金による制裁が加えられ、強固な共同性の維持がはかれる。このような共同労働を基軸とする慣行的秩序にシンボルの機能を付与しているのが、堰霊と堰霊祠の儀礼である。

c) 堰霊祠の儀礼

堰および取水点付近、いわば頭首工部分の領域は堰頭 *hua fai* とよばれ、それを守護する堰霊 *phī fāi*, *phī haksā fāi* が存在するという観念は、ランナータイには広汎にみられ、歴史的にもランナータイ古代にまでさかのぼる。すでにランナータイ古代法を集成した『マンラーイ法典』*Mangrāiyasāt* の中に堰祠 *hō pūcha fāi* の破壊に対する処罰規定がみられる [KRAISĪ, 1965a: p. 12], [PRASOET, 1971: p. 97], [田辺, 1976]。また堰を守護する堰霊信仰とその儀礼については、すでに雲南 *Sipsōng Pannā* のルー族、Chiang Rāi 県のルー族、あるいは Mae Hōng Sōn 県 Mae Sariang 地域など断片的な報告がみられる [CHEN, 1949: p. 42], [BUNCHUAL, 1954: p. 591], [MOERMAN, 1968: p. 50], [飯島, 1971: p. 136]。

ノーパーマン堰においては、19世紀の最初の堰築造と同時に、その地を守護する堰霊の寄代 *sūa phī* として堰霊祠が右岸に建立されたと伝えられ、今日にいたっている。堰霊は霊 *phī* (カミ) の一つとして村人が畏怖すべき神聖な対象とされ、それによって鎮守 *haksā* されるべき枢要な設営物としての堰の権威が象徴されている。とりわけ堰頭とよばれる堰および取水点の領域に対する破壊行為 *kān tham lāi*, すなわち堰の堤体の切り崩し、樹木の伐採などを行なった者は堰霊が憑依 *khao phī* して病に伏すと観念される。堰霊はこのように設営物としての堰を含む土地を守護する、いわば土地霊(土地ガミ)的性格が強く、組織集団としての堰組それ自体を象徴するものではないと考えられる⁵⁴⁾。

54) タイおよびランナータイの霊概念においては、いたる所に遍在する霊とともに特定の場所を守護するとされる霊がみられ、堰霊はまさにこの土地霊の一つと考えられる。

堰霊のこのような土地霊的性格について、すでに Kraisi は、ラーンナータイの伝統的な堰霊祠は中部タイにひろくみられる土地霊祠 *sān thēphāarak* と同質のものだと鋭い指摘をしている [Kraisi, 1965a: p. 11]。

ノーンパーマン堰の堰霊祠は右岸に建てられ、方 1 m 程の 4 本柱の高床で *tōng tūng* を葺いた粗末な小屋にすぎず、チェンマイ盆地各地にみられるもっとも一般的な形態の堰霊祠である (写真 33, 34)。祠の床は数本の割竹が敷かれるのみで、祠内は何も置かれない。堰霊祠は堰霊が去来する際の寄代であり、*sūa pī* (霊のいれ物・ケース) とされる。このような一般的な形態に対し、チェンマイ盆地では時として、中部タイの一本柱の土地霊祠 *sān phraphūm čhao thī*, *sān thēphāarak* と同じ形態の祠が堰頭に配されることがあり、Phayā Kham 堰の例がその典型である。Phayā Kham 堰の堰頭には堰守の常駐する小屋とともにこの形態の堰霊祠が置かれているが、10数年前までは伝統的な 4 本柱の祠であったといわれる (写真32)。この場合、堰霊祠が本来的に土地霊祠的性格を有するため、中部タイの一本柱土地霊祠の転用が行なわれたのではないかと考えられる。

堰霊祠の儀礼は堰組全員が参加して行なわれるものではあるが、堰頭付近に居住して堰・用水路の監視の任にあたる堰守が最も強く関与する傾向がみられる。メーリム谷の各堰の場合、堰霊の儀礼 *kān liang pī fāi* (堰霊供養) を司るのはすべて堰守で

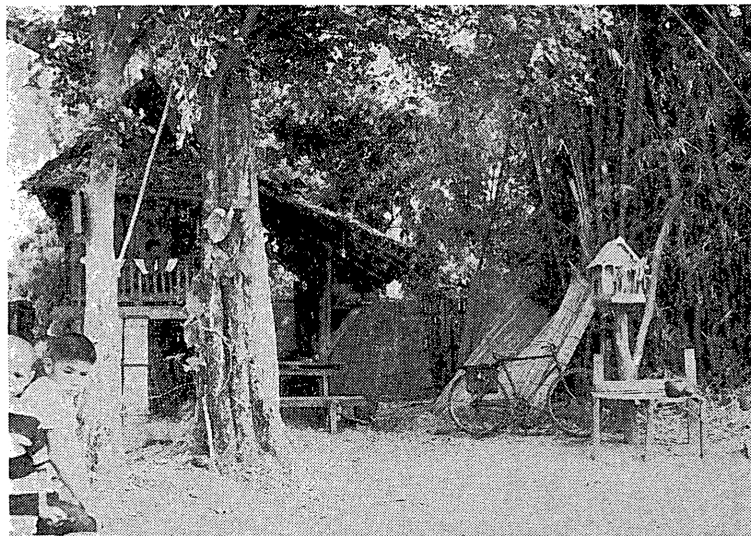


写真32 Phayā Kham 堰頭の本柱の中部タイ型土地霊祠と同じ形態をとる堰霊祠 (1975年2月)
左側は、堰守の常駐小屋。

あり、堰組の指導者としての堰長の関与はほとんどみられない。このように儀礼の司祭がその土地に近い堰守の手にゆだねられていることは、堰霊信仰の土地霊的性格ときわめて密接な関係をもつと考えられる。

ローンパーマン堰の儀礼は6月19日の主堰普請日の朝から準備が開始される。堰守は前もって堰組のメンバーでしかも村に居住する者の中から3名の堰守補佐 *lūk chuai pō fāi* を選び、前日から供物の買出し準備にしたがう。堰組各員から2パーツずつ徴収された堰霊供養料 *khā liang phī fāi* (表12) で豚の頭と脚4本、肉、野菜など供物の材料をメーリムの朝市で購入し、3人の補佐役とともに堰守の家で調理が行なわれる。供物として用意されるものは ① 生の豚頭 *hua mū*・豚脚 *khā mū* ② *lāp lūat* (牛生肉と牛生血で調理されたランナータイ風タルタル・ステーキ) ③ *kaeng ɔm* (牛・豚内臓を長時間煮込んだスープ) ④ *lao klan* (モチ米製焼酒) ⑤ 葉巻 *buli khī yō* ⑥ *miang* 醱酵茶と岩塩小片 ⑦ はざし米 *khao taek* (C.T.: *khao tōk*) ⑧ モチ飯 *khao nūng* ⑨ 朱色素焼水壺 *nam ton* ⑩ コップ *kōk* (C.T.: *chōk kaoe*) ⑪ アルミ製さじ ⑫ 献花・ロウソク・線香などである(写真33, 34)。これらのうち豚頭・豚脚は堰霊に対する最も不可欠な犠牲であり、犠牲をとまなうこの種の供養を *kān liang hua mū* (豚頭供養) と呼ぶゆえんでもある⁵⁵⁾。ランナータイ固有の牛生肉料理である *lāp lūat* および *kaeng ɔm* は、日常の食事においては客接待の際にしばしば用意される最も格調高い正餐用の代表的な献立であり、とりわけ生肉生血を用いる *lāp lūat* は、豚頭とともにさまざまな霊供養 *kan liang phī* の儀礼に広く用いられる⁵⁶⁾。他の一連の供物は霊供養から仏教の儀礼にいたるまできわめて一般的に用いられる基本的供物である。

年頭組の主堰普請が中止され、ただちに堰霊祠の祭祀にはいることが堰長によって堰守に伝えられると、堰守は3人の補佐役とともに急ぎ、メーリム川を渡渉してこれらの供物を祠まで運ぶ。堰守らは祠の前で礼して「畏くも栄えあれ、今日は佳き日、栄えありき吉祥の日、私めが堰霊をお招きいたしましょう。ここに我らはこぞって豚頭と少しばかりの供物を持参いたしました。これらは貴方様にすべて平らげていただくために持参したものです。 *salī sawatsadi suan wā atcha nai wan nī kō pen wan dī pen wan mangkhala an plasoet khā čhak čhoen phī haksā fāi batnī tūkhā thanglāi kō nam ao mā hua mū khūang pūčhā sak nōi kō phūa wā čhak mā hū*

55) 豚頭供養は堰霊祠の儀礼の他、母系親族関係者によってまつられる祖霊 *phī pū nā*, *phī āhak* の供養においても用いられる。

56) *lāp lūat* は仏教儀礼では用いられない。



写真33 堰霊祠内にそなえられた供物
(1975年6月19日)
籠 piat の中は豚頭・豚脚、盆の上は lap
lūat, kaeng ɔm, khao nūng, 他に一連
の供物がみえる。

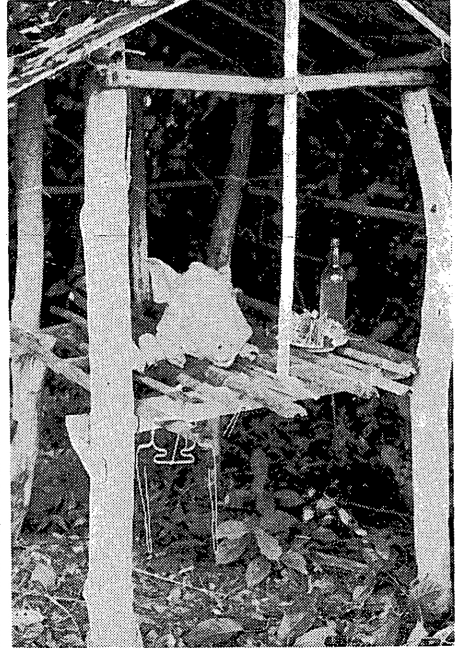


写真34 堰霊祠内の豚頭と豚脚
(1975年6月19日)

sūthan dai kin siang……」などと呪文 khāthā を唱えつつ、持参した供物を祠内にしつらえる。この時点で堰霊は祠内に降臨し供物を食するといわれ、その間約1時間、堰守ら4人は堰霊祠に背を向けて無言のまま霊の食事をさまたげない。その後、霊が満腹して祠から去った時点で彼らは豚頭・豚脚をのぞく供物を、前もって用意された tōng tūng で編まれた5個の盛鉢 khuak (C.T.: krathong)⁵⁷⁾に分け取り、取水点の主要個所を守護するとされる堰霊の輩下の霊 lūk phī fāi に裾分けされる(写真35)。輩下の霊が守護する地点は主堰・支堰の越流吐端の4カ所と取水口であり、4人によって裾分けされた盛鉢がその地点に供えられる(図13)。堰守が司祭する儀礼の進行する間、堰組の全メンバーは堰長を含め対岸の左岸に結集し無言のまままで待つのみである。

堰守が左岸にもどって堰長に儀礼がとどこおりなく終了したことを告げると、堰組は堰字の堰守の家に移り直会の共食の宴にはいる。豚頭・豚脚は適当に切りさいて小

57) 中部タイの krathong は基本的にはバナナ葉 bai tōng で編まれる。



写真35 5カ所の輩下の霊 lūk p̄hī fāi のための供物の分配 (1975年6月19日)

片に分けられ、数人ずつのメンバーに分配され、それぞれのグループごとに家に持ち帰り調理されて共食の宴会に供される。堰組90名中30数人は堰守宅に止まり調理を手伝いつつ、夜ふけまで宴がくりひろげられる。

ノーンパーマン堰霊祠の儀礼に一貫してみられる現象は司祭としての堰守の主導的機能であり、それは堰そのものが大地と合体した過去からの累積的な堰組の労働の蓄積であり、しかもそれを象徴する堰霊自体がその土地を守護する霊としての性格を保持することと強く関係している。堰組の共同労働を組織し、灌漑体系の慣行的秩序を維持する指導者としての堰長はそこにまったく関与することがない。堰長は堰の置かれた母村であるノーンパーマンを核心としながら、それを越える水がかりのメンバーをも堰組として統合する機能をもつ一方、堰守は堰自体と強く関わり、また土地霊としての堰霊を制御する機能を保持している。堰によって形成される灌漑体系は、母村から拡大した堰組の慣行的秩序を生みだし、その権威は堰霊信仰によって象徴される。しかし堰霊は集団そのものを象徴するよりも、むしろ土地霊の性格のうちに止まり、そのために堰組は慣行的秩序総体を統合・組織する堰長職から、日常的に堰と堰霊に関係する堰守職を分化させていったと考えられる。

V. むすびにかえて

ラーンナータイの稲作は雨季稲作を中心に、堰・用水路の体系を有する伝統的な重

力灌漑による灌漑農業として発達してきた。チェンマイ盆地に展開するこれらの灌漑体系を典型的に把握するならば、盆地の地形的・水文的条件にしたがって支谷・扇状地型体系、沖積平野型体系、統合井堰型体系に分類できる。これらの3類型は重力灌漑形式の技術の一系列の発展としてとらえられるが、それらの築造に要する労働力、分配されるべき用水量、したがって灌漑可能面積の間には飛躍的な差がみとめられる。これらの3類型の灌漑体系は盆地のさまざまな生活空間に応じて古代ランナータイ以来展開をみたが、大規模な沖積平野型体系あるいは統合井堰型体系の形成は、盆地の政治権力による社会・政治的統合の進展と強い関連性をもっていたと考えられる。これに対して小規模な支谷・扇状地型体系は、おそらく発生的にはもっとも始源的な形態と考えられ、村落社会レベルの協業の組織化によって築造・管理・維持され得る完結した性格を有している。ランナータイ稲作技術の中核をなす灌漑体系とそこに形成される社会・文化の原基的形態は、今日まで存続するこれらの小規模な支谷・扇状地型体系の中に求めることができるのである。ノーンパーマン堰の灌漑体系とそれをめぐる灌漑水利慣行の諸特徴は、まさにランナータイ稲作社会の性格を規定する技術（文化）的、社会的な慣行的秩序の一つの典型と考えられるのである。

ランナータイの伝統的な灌漑体系、すなわち堰・用水路体系およびそれらによって用水として獲得された水の存在は、稲作の農業生産の要素の中では一連の農具・資本などの技術、あるいは農作業全体に要する生の労働力そのものと多少異なり、改造された大地の一部、すなわち大地に合体した土木施設としてむしろ土地のカテゴリーに近似したものと見える。改造された大地としての灌漑体系は、ノーンパーマン堰がかりのごとく、19世紀の入植時における多大な労働力の投入による築造とそれにつづく毎年の用水普請をとおして形成された過去の労働の蓄積に他ならない〔玉城、1976: pp. 64-79〕,〔友杉、1976: pp. 148-151〕。

過去の労働の蓄積の結果としての灌漑体系、とりわけその伝統的な堰は一時的な仮締切堰の構造形態をとり、その施設の不完全性ゆえ、毎年の堰普請と底浚えからなる用水普請を必然的なものとしている。伝統的堰は用水確保と同時に洪水防御という消極的機能を併存させる形態をとり、過去の労働の累積的な蓄積の一部は、自然の営力によって削減され、そこに新たな労働力の集中的投入が必要とされる。このように伝統的な仮締切堰は、用水確保と洪水防御という相反する自己矛盾的機能を内包することによって、過去の蓄積に加えて自然への不断の労働蓄積を集中する必然性をもった本来的な不完全性を有するのである。

このような堰の構造形態に規定された不完全性によって、灌漑体系は用水普請のた

めの高度な共同性を発生させたと考えられる。この共同性は一連の灌漑水利慣行としての慣行的秩序として定着し、それらの秩序を体現する用水組織としての堰組を生みだした。堰組形成の主要な契機は用水普請における用材調達と共同労働の組織化、および用水配分であるが、ノンパーマン堰組にかんするかぎり、共同労働組織化がより重要な契機をなしている。雨季稲作を行なう年頭組においては、雨季の取水量の豊富さのため、基本的に常水の掛流し法が卓越して、比較的安定した用水供給が実現している。したがって用水配分をめぐる慣行的秩序は概して柔軟なものであり、樋口規制などの一連の厳格な番水規制は存在せず、水論先鋭化の徴候はほとんどみられない。それに対して用水普請の共同労働においては労働力・用材供出義務が、科料による制裁とともに厳格に規定され、共同労働への統合・結束が顕著に強調されている。このような堰組の性格的特徴は、多様な番水規制をともなう用水配分の厳格な慣行的秩序を生みだした日本の近世用水組織と異なっている。しかしノンパーマン堰組の場合、もしも今後乾季稲作の経営面積が増大した場合、堰組内部はもとより堰組間の番水をともなう用水配分規制がより強化されるであろうことは十分予想されうる。現在みられる乾季組による堰組間の乾季堰普請の自己規制はその徴しであろう。

堰組の用水普請をめぐる共同労働は、ランナータイの伝統的稲作社会の中にみられる生業・生産をめぐる協業の中でも、きわめて共同性の高い質をもっている。たとえば稲作の主要な作業過程において各農家間で行なわれる等価的な労働力交換は *ao mü sai mü* とよばれ、日本のユイ慣行に近似して、協働労働組 *mü ao mü sai mü* を形成している。この協働労働組は親族関係および経営耕地の近隣関係を契機とした、労働力の交換原理にもとづくインフォーマルな協働組織である。これに対して堰組は、法的な土地所有権こそ確定されていないが、地上的な堰・用水路を共同の用益権として確保し、実質的な共同所有の関係を内包している。堰組は過去の労働の蓄積としての共同の堰・用水路を媒介として成立した組織であり、過去の労働の蓄積に対して不断に新たな蓄積をくり返す労働の蓄積原理と、確保された用水配分による分配原理からなりたっている。このような堰を媒介にした労働の蓄積と分配の原理にもとづく堰組の共同性は図14のごとくである。用水普請による労働の蓄積はメンバーに対する普請労働力の供出と用材の供出義務によって実現される。これらの労働の蓄積は堰・用水路を媒介として用水として対象化され、樹枝状に展開する分水施設をとおしてメンバーに分配される。

このような蓄積と分配の原理に基づく堰組は慣行的秩序の共同性を組織化し、管理・維持する堰長・堰守職を有し、メンバーから定まった報酬として樋口料が分与され

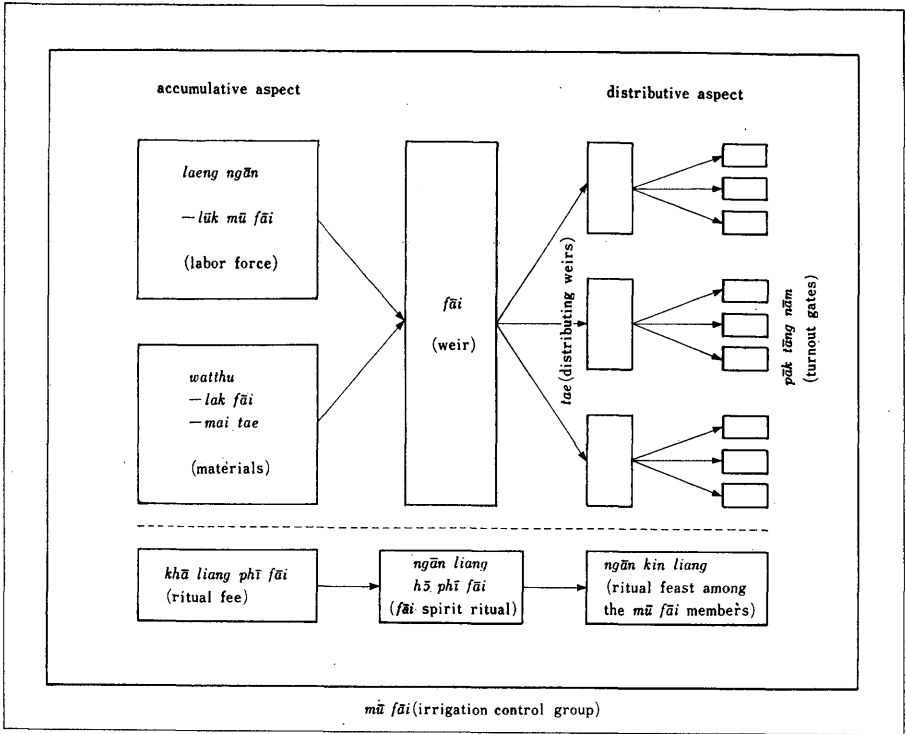


図14 灌漑体系における蓄積と分配の構造

る。労働の蓄積としての堰には堰霊信仰としての霊的権威が付与され、堰組の共同性のシンボルとして機能している。堰霊は土地霊の性格を強くもち、過去の労働の蓄積としての堰を象徴し、集団としての堰組自体を象徴してはいないが、堰守によって司祭される堰霊祠の儀礼とその後における豚頭の分配と共食によって、堰組の一体性・共同性の強化が志向されると考えられる。共同労働と分配に基づく堰組の幻想的共同性がこれらの堰霊信仰の中に集約的に表現されているのである。

このようなランナータイの伝統的灌漑体系をノーンパーマンの具体的な村落社会の歴史的展開過程と関係づけるならば、図15のごとく表わすことができる。19世紀のカーウィラ朝ランナータイの復興期において、伝統的な *kep phak sai sǎ kep khā sai mũang* の捕虜入植政策の一環として定着したノーンパーマンのルー族は、既存のフェイスイ堰がかりの余水の承水と新たな体系としてのノーンパーマン堰がかりの創出によって、先住の2村落の間に新たな生活空間をきり開いた。この時期のパイオニア集落は、フェイスイ堰がかりに対応する堰字 *Bān Fāi* とノーンパーマン堰がかりに対応する中央字 *Bān Klāng*・川向う字 *Bān Lāinā* の二つに分化していた

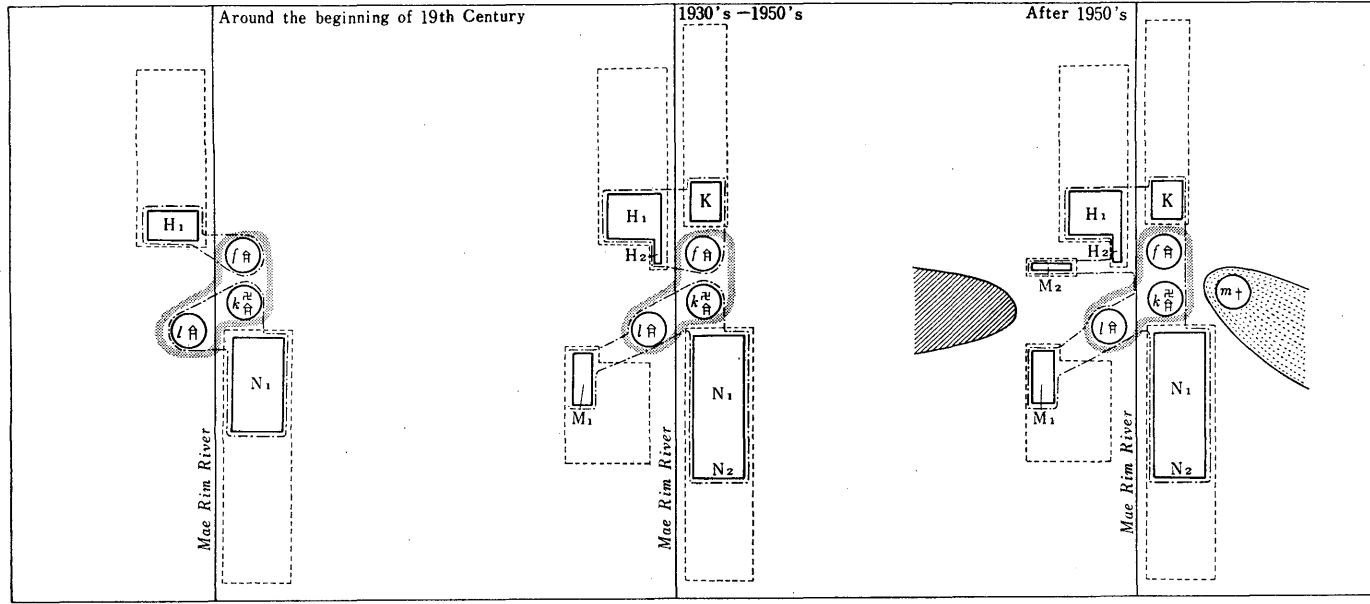


図15 ノーンパーマンにおける社会組織と耕地の展開過程

- : irrigated paddy fields
- : *hai* (upland rice fields in the *phae*)
- : *lamyai* (longan, *Euphoria longana*) and *kuai* (banana) orchards in the *phae*
- : settlement or *bān sūa bān diaokan*
- : *bān fāi diao kan* (the same *fāi* group within the village)
- : *mū fāi* (*fāi* irrigation control group)
- : *mūbān Nōng Pāman* (*Nōng Pāman* village)

- f* : *Bān Fāi*
- k* : *Bān Klāng*
- l* : *Bān Lāinā*
- m* : *Bān Mai* (New Settlement)
- N_1, N_2 : irrigated by *Fāi Nōng Pāman*
- H_1, H_2 : irrigated by *Fāi Huai Sāi*
- K : irrigated by *Fāi Nāhūk*
- M_1, M_2 : irrigated by *Fāi Mae Raem*
- ⌘ : *sūa bān* (settlement spirit house)
- 卍 : *Wat Sawāng Phet*
- +

と考えられる。いわば灌漑体系を媒介とした生産と生活の場を共有する二元性が現出し、堰がかり同一集団 *bān fāi diaokan* とよばれる。1930年頃までの *Khun Sāisa-rakit* の時代においてはこの二元性は、「西堰がかりのムラ」*bān fāi diaokan tawan tok* (堰字), 「東堰がかりのムラ」*bān fāi diaokan tawan 5k* (中央字・川向う字) と表現されたといわれる。しかし同時に共住する集落としての地縁的同一性もみられ、字に共住する統合の象徴としての字祠 *sūa bān* を共有する字祠同一集団 *sūa bān diaokan* の形成は入植当初から今日にいたるまで存続している。堰がかり同一集団と字祠同一集団の双方を統合・積分する象徴は、入植以後間もなく建立されたサワーンペット寺であり、上座部仏教による村人の精神的紐帯を形成させていったと考えられる。ノーンパーマンの村としての実体は、灌漑体系(堰がかり同一集団)、字=集落(字祠同一集団)、村といった各レベルの重層的な統合の結果であろう。

村人の飯米生産を保証する雨季稲作の生産の場、すなわち各堰がかり・堰組の内部に包摂される耕区の歴史的展開をみるならば、1930年—1950年代にかけての土地占取による開田の進行によって一つの極相に達したと考えられる。ナーフク、メーレーム堰がかりの灌漑体系の余水を受けることによって、他の既存の2堰がかりの耕区を含めて、村の各レベルの社会集団と耕地および用水をめぐる生態的環境が、安定した状態に到達したと考えられる。雨季稲作の存立の規定要因としての灌漑を媒介とした極相の現出である。19世紀初頭の入植時点における開田の進行は、いわば遷移の始相であり、1930年—1950年代の可耕地占取の完了をもって、灌漑を契機とする極相に達するが、しかしその間にも安定した極相を崩壊せしめる他の潜在的要因の形成がみられる。各耕区、各字間の経営耕地の交錯化、および地主小作関係の形成、すなわち耕地をめぐる生産関係の交錯化の進展である。すでに1910年—1920年代にみられた親族内地主小作関係の形成に端を発し、1930年代以降には親族外地主小作関係が増加し、さらに現物折半の小作料形態の卓越により、土地所有関係の不均衡が現れた。これらの社会経済的な諸関係は、灌漑を媒介として成立した社会集団と耕地の間の生態学的な安定に対して、その外部に形成されたものである。

1930年—1950年代に到達したノーンパーマンの文化生態学的な極相は、今日にまで存続する村としてのまとめり、すなわち堰組、堰がかり同一集団、字祠同一集団(字)および村などの各レベルの社会集団の村としての統合性を現出し、それを反映しているかのように見える。今日にみられる経営耕地の分散交錯圃の形成は、あたかも安定した極相の継続であるかのようなようであるが、その背後には、土地所有関係の不均衡に端的にあらわれているような社会経済的な不安定を内包している。占取すべき可耕地を

失ったノンパーマン村人の間では、土地を求める小作および農業労働者の村内滞留が顕著に認められ、phae の焼畑陸稲耕作に飯米生産を依存せねばならない状況が現出しているのである。

謝 辞

本稿の基礎となった調査は、筆者が昭和48年度文部省アジア諸国派遣留学生として派遣され、タマサート大学経済学部客員研究員としてタイ国に滞在した間（1974年7月15日—1975年12月31日）に行なわれた。この貴重な機会を与えて下さった梅棹忠夫国立民族学博物館長、佐々木高明教授（本館第2研究部長）、石井米雄教授（京都大学東南アジア研究センター・本館第2研究部併任教授）にまず何よりも感謝申し上げます。とりわけ佐々木教授には、ネパール王国民族資料収集調査期間を含めて、フィールド調査に対する「気合い」と技術を学び、農耕技術研究の細部にわたる指導をたまわった。また石井教授には長年にわたるタイ語、タイ文献学的研究の指導をたまわり、1975年5月の調査村来訪に際しては、調査内容に関して的確な指示をいただいた。

本稿の立論の基盤となった灌漑をめぐるタイおよびランナータイ稲作社会論は、1967年6月21日の第104回京都大学人類学研究会（近衛ロンド）以来、石井教授、高谷好一教授（京都大学東南アジア研究センター）、海田能宏助教授（同）、友杉孝教授（立教大学文学部）らによって執念深く続けられてきた議論に負うところが多い。また海田助教授には、中部タイのデルタのアユタヤーの調査を含めて、灌漑・排水学の立場から指導をたまわり、石毛直道助教授（本館第5研究部）には、1975年10月の調査村来訪を機会に、物質文化研究に関する指導をたまわった。記して深く感謝する所である。

ขอขอบพระคุณในไมตรีจิต ที่ป้อหลวง สิงห์คำ ศรีมูลเมือง และชาวบ้านทุกท่านได้ให้ความเมตตา และความสะดวกสบายทุกประการแก่พวกเราทุกคน ระหว่างระยะเวลาที่เราปฏิบัติงานค้นคว้าวิจัยในหมู่บ้านหนองปลาหมื่น ตำบลห้วยทราย อำเภอแม่ริม จังหวัดเชียงใหม่ ในโอกาสอันจึงขอขอบพระคุณเป็นอย่างมาก และขอระลึกในน้ำใจอันดีของท่านด้วย

อนึ่ง ผู้เขียนใคร่จะขอกล่าวเพิ่มเติมอีกสักหน่อยว่า การค้นคว้าวิจัยที่สำเร็จผลได้ในประเทศไทยซึ่งได้กล่าวมาแล้วนั้น หากไม่ได้ข้อเสนอแนะและความช่วยเหลือของอาจารย์และเพื่อนอันจะกล่าวต่อไปนี้แล้วไซ้ กระผมคิดว่า งานวิจัยดังกล่าวคงจะไม่ประสบความสำเร็จอันดีทุกประการ

ดร. เตช ฆนนาท (หัวหน้ากองเอเชียตะวันออกเฉียงใต้ กรมการเมือง กระทรวงการต่างประเทศ)

ดร. ณรงค์ชัย อัครเศรณี (คณบดี) ดร. อัมมาร์ สยามวาลา ดร. ลีลี โกศยานนท์ (คณบดี) อ. ไพฑูรย์ สายสว่าง อ. นิตยา มาพิงพงศ์ อ. รังสรรค์ ธนะพรพันธ์ (คณะเศรษฐศาสตร์ มหาวิทยาลัยธรรมศาสตร์)

ร.ต.อ.ดร.ม.ร.ว. อकिन รพีพัฒน์ อ. เสน่ห์ ญาณสาร ดร. ชาญวิทย์ เกษตรศิริ อ. ยุทธ ศักดิ์เดชยนต์ (คณะศิลปศาสตร์ มหาวิทยาลัยธรรมศาสตร์)

ดร. ประเสริฐ แยมกลิ่นพุง (คณะรัฐศาสตร์ จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย)

ผู้ช่วยศาสตราจารย์ เกษม บุรกลีกร อ. สุเทพ สุนทรภัสช์ อ. สมหมาย เปรมจิตต์
อ. สมพงษ์ ชิวสันต์ (ภาควิชาสังคมวิทยา และมานุษยวิทยา คณะสังคมศาสตร์ มหาวิทยาลัยเชียงใหม่)

ดร. สง่า สรรพศรี (เลขาธิการ) ดร. จุมพล สวัสดิ์ติยากร (รองเลขาธิการฝ่ายสังคมศาสตร์)
นาง เตือนใจ เฝยกลิ่น (สำนักงานคณะกรรมการวิจัยแห่งชาติ)

นาย จาริน อัดทะโยธิน นาย อุดร มุ่งเกษม นาย ชลอ ประณะพรรค์ นาย สมบูรณ์
สารมัญ นาย พายัพ ทองสูง (กรมชลประทาน กระทรวงเกษตรและสหกรณ์)

นาย จรัส พิกุล นาย ทวีศิลป์ สืบวัฒนะ (จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย) นาย เกียรติกร
สร้อยสิงห์ (คณะเศรษฐศาสตร์ มหาวิทยาลัยธรรมศาสตร์)

และสุดท้ายนี้ ใคร่จะขอกราบขอบพระคุณทุกท่านที่ได้กล่าวนามมาแล้วข้างต้น และที่มีได้
กล่าวถึง ซึ่งได้ให้โอกาสและความสนับสนุนต่าง ๆ จนทำให้โครงการวิจัยนี้ดำเนินไปได้ด้วยดี

文 献

Ammāyāthibodī, 1962, พระยามหาอำมาตยาธิบดี (หรุ่น), พงศาวดารเมืองนครเชียงใหม่ เมือง
นครลำปาง เมืองลำพูนไชย, พิมพ์แจกในงานศพพระพิจิตรโอสถ, พ.ศ. ๒๕๐๕.

『チェンマイ・ラムパーン・ラムパーンチャイ年代記』

Anuman Rajadhon, Phraya, 1963, *The Nature and Development of the Thai Language*, Fine Arts
Department, Bangkok.

———, 1973, “ชีวิตของชาวนา, ” ประเพณีเบ็ดเตล็ด, หนังสือชุดประเพณีไทย ของเสฐียร

โกเศศ, สำนักพิมพ์สมาคมสังคมศาสตร์แห่งประเทศไทย พระนคร, พ.ศ. ๒๕๑๖.

(『農民の生活』『サティアンコーセータイ民俗慣行論集—諸種の慣行—』所収)

Bayard, Don T., 1972, “Excavation at Non Nok Tha, Northeastern Thailand,” *Asian Perspectives*,
Vol. 13, pp. 130-145.

Boeles, J. J., 1966, “Rice Sickles and Rice Knives used in Thailand,” J. J. Boeles & Larry
Sternstein ed., *The Kamthieng House*, The Siam Society, Bangkok, pp. 49-51.

Brailey, Nigel J., 1973, “Chiengmai and the Inception of an Administrative Centralization
Policy in Siam (I),” *Tonan Ajia Kenkyu (Southeast Asian Studies)*, Vol. 11-3, pp. 229-320.

———, 1974, “Chiengmai and the Inception of an Administrative Centralization Policy
in Siam (II),” *Tonan Ajia Kenkyu (Southeast Asian Studies)*, Vol. 11-4, pp. 439-469.

Bunchuai, 1954, บุญช่วย ศรีสวัสดิ์, ไทยสิบสองปันนา, สำนักพิมพ์ศิลปวิทยา พระนคร, เล่ม ๑,

พ.ศ. ๒๔๙๘. (『シブソーンパンナーのタイ族』卷1)

Carter, A. C., ed., 1904, *The Kingdom of Siam*, London.

Čhārubut, 1973, จารุบุตร เรืองสุวรรณ, ภูมิศาสตร์เศรษฐกิจและทรัพยากร, โรงพิมพ์บำรุงนุกูล

กิจ พระนคร, พ.ศ. ๒๕๑๖. (『經濟・資源地理学』)

Chen Han-seng, 1949, *Frontier Land System in Southernmost China*, New York.

- Chin, 1973, *ชิน อัยคี, วัฒนธรรมบ้านเชียง ในสมัยก่อนประวัติศาสตร์, กรมศิลปากร พระนคร,*
 พ.ศ. ๒๕๑๖. (『バーンチェン先史文化』)
- , 1975, *Ban Chiang Prehistoric Cultures*, Fine Arts Department, Bangkok.
- Credner, Wilhelm, 1935, *Siam das Land der Tai, Eine Landeskunde auf Grund eigener Reisen und Forschungen*, Stuttgart.
- Damrong, 1966, *กรมพระยาดำรงราชานุภาพ, “คำนำ ประชุมพงศาวดาร ภาคที่ ๕ (พ.ศ. ๒๔๖๑),”* *ประชุมพงศาวดาร, องค์การค้าของนครสภา พระนคร, เล่ม ๕, พ.ศ. ๒๕๐๗.*
 (『史料集成卷 9 序文 (A.D. 1918)』『史料集成』クルサパー版卷 9)
- de Young, John E., 1958, *Village Life in Modern Thailand*, Univ. of California Press.
- Dobby, E. H. G., 1958, *South East Asia*, Univ. of London Press.
- 福井捷朗, 1975, 「水稻栽培の現状と展望」石井米雄編『タイ国—ひとつの稲作社会—』創文社, pp. 311-357.
- Gee, C. D., 1930, “Irrigation,” The Ministry of Commerce and Communications, ed., *Siam: Nature and Industry*, Bangkok, pp. 185-203.
- Graham, Walter Armstrong, 1924, *Siam* (3rd edition), Vol. 2, A Moring, London.
- Hopfen, H. J., 1960, *Farm Implements for Arid and Tropical Regions*, FAO, Rome.
- 飯島 茂, 1971, 『カレン族の社会・文化変容—タイ国における国民形成の底辺—』創文社。
- 石井米雄, 1965, 「タイ語文献について(4)—諸地方の Phongsawadan—」『東南アジア研究』 Vol. 2-4, pp. 38-51.
- , 1966, 『タイにおける不自由労働制の解体』アジア経済研究所。
- , 1975, 「歴史と稲作」石井編『タイ国』創文社, pp. 16-45.
- 岩田慶治, 1963, 「北部タイにおける稲作技術—タイ・ヤーイ族とタイ・ルー族の場合—」『東南アジア研究』 Vol. 1-2, pp. 22-38.
- , 1964, 「インドシナ半島北部におけるタイ諸族の家族と親族—タイ・ヤーイ族, タイ・ヌア族, タイ・ルー族社会の比較—」『民族学研究』 Vol. 29-1, pp. 1-31.
- 海田能宏, 1975, 「かんがい排水の現状と展望」石井編『タイ国』創文社, pp. 252-310.
- Kamol Odd Janlekha, 1955, *A Study of the Economy of a Rice Growing Village in Central Thailand*, Division of Agricultural Economics, Ministry of Agriculture, Bangkok.
- Kaufman, Howard Keva, 1960, *Bangkhua: a Community Study in Thailand*, Association for Asian Studies, monograph No. 10, Locust Valley, N. Y.
- Keyes, Charles F., 1975a, “Buddhism in a Secular City, A View from Chiang Mai,” *Visakha Puja, B. E. 2518*, The Buddhist Association of Thailand, pp. 62-72.
- , 1975b, “Buddhist Pilgrimage Centers and Twelve-year Cycle: Northern Thai Moral Orders in Space and Time,” *History of Religion*, Vol. 15-1, The Univ. of Chicago, pp. 71-89.
- Kingshill, Konrad, 1965, *Ku Daeng-The Red Tomb, A Village Study in Northern Thailand*, Bangkok Christian College, Bangkok.
- 喜多村俊夫, 1971, 『日本灌漑水利慣行の史的研究—総論篇—』岩波書店。
- Kraisī, 1965a, *ไกรศรี นิมมานเหมินท์, “กฎหมายชลประทานของพ่อขุนเม็งราย,”* *สังคมศาสตร์ปริทัศน์*, ปีที่ ๓ ฉบับที่ ๑, สมาคมสังคมศาสตร์แห่งประเทศไทย, พ.ศ. ๒๕๐๘, หน้า ๑๐-๑๔. (「メーヌラーイ王の灌漑法」『社会科学評論』 Vol. 3-1, pp. 10-14)
- , 1965b, “The Irrigation Laws of King Mengrai,” Lucien M. Hanks, Jane R. Hanks & Lauriston Sharp ed., *Ethnographic Notes on Northern Thailand*, Data Paper No. 58 of the Southeast Asia Program, Dept. of Asian Studies, Cornell University, pp. 1-5.
- , 1965c, “Put Vegetables into Baskets, and People into Towns,” Lucien M. Hanks et al., ed., *Ethnographic Notes on Northern Thailand*, pp. 6-9.

- Krasuang Kasēt, 1957, กระทรวงเกษตร, ประวัติกระทรวงเกษตร, พิมพ์เป็นที่ระลึกในงานเปิด
ตึกที่ทำการกระทรวงเกษตร, พระนคร, พ.ศ. ๑๕๐๐. (農務省編『農務省史』)
- Krasuang Kasēt lae Sahakōn, 1972, กองเศรษฐกิจการเกษตร สำนักงานปลัดกระทรวง กระทรวง
เกษตรและสหกรณ์, การใช้ที่ดินของประเทศไทย ปี ๒๕๑๔, กระทรวงเกษตรและ
สหกรณ์, พ.ศ. ๒๕๑๕. (農務・協同組合省次官官房農業經濟課編『1971年タイ国
土地利用』)
- , 1970–1975: กองเศรษฐกิจการเกษตร สำนักงานปลัดกระทรวง กระทรวงเกษตร
และ สหกรณ์, สถิติการเกษตรประเทศไทย, ๒๕๑๐–๒๕๑๖, กระทรวงเกษตรและสห
กรณ์, พ.ศ. ๒๕๑๓–๒๕๑๘. (農務・協同組合省次官官房農業經濟課編『タイ国農業
統計, 1967年–1973年』)
- Krom Chonprathān (Royal Irrigation Department), 1969, แผนกโครงการชลประทานพายัพ
จังหวัดเชียงใหม่ กองชลประทานหลวง กรมชลประทาน, รายงานการสร้างโครงการ
เหมืองผาแตก จังหวัดเชียงใหม่, กรมชลประทาน, พ.ศ. ๒๕๑๒. (灌溉局計画・管
理課西北灌溉事業係『チェンマイ県パーテューク用水路建設事業報告』)
- , 1972a, *Tables Showing Water Resources Development in Thailand, Completed to the end
of 1971 and under construction in 1972*, Royal Irrigation Department, Bangkok.
- , 1972b, โครงการชลประทานหลวงแม่แตง กองชลประทานหลวง กรมชลประ
ทาน, ประวัติและข้อมูล ของ โครงการชลประทานหลวงแม่แตง อำเภอแม่แตง จังหวัด
เชียงใหม่, กรมชลประทาน, พ.ศ. ๒๕๑๕. (灌溉局計画・管理課メーテーン灌溉事
業『チェンマイ県メーテーン郡メーテーン灌溉事業の歴史と資料』)
- Krom Pāmai, 1948, กรมป่าไม้, หนังสือชื่อพรรณไม้แห่งประเทศไทย ชื่อพฤกษศาสตร์-ชื่อ
พื้นเมือง, กรมป่าไม้ พระนคร, พ.ศ. ๒๔๙๑. (森林局『学名一地方名・タイ国植
物名』)
- Krom Phattanāthidin, 1969, กองนโยบายที่ดิน กรมพัฒนาที่ดิน กระทรวงพัฒนาการแห่งชาติ,
ความสัมพันธ์ระหว่างการถือครองที่ดินกับภาวะการผลิตของชาวนาใน ๑๑ จังหวัดภาค
กลาง พ.ศ. ๒๕๐๘, รายงานเศรษฐกิจที่ดิน ฉบับที่ ๓, พระนคร, พ.ศ. ๒๕๑๒.
(国家開発省土地開発局土地政策課『1965年中部地方11県における農民の土地所有と生
産の関係』)
- Krom Phaenthī Thahān, 1972, กรมแผนที่ทหาร กองบัญชาการทหารสูงสุด, แผนที่เล่มแสดง
ทรัพยากรของประเทศไทย, กรมแผนที่ทหาร พระนคร, พ.ศ. ๒๕๑๕. (タイ国軍
最高司令部軍地図局『タイ国資源地図帖』)
- 久馬一剛, 1975, 「気候と稲作」石井編『タイ国』創文社, pp. 207–214.
- Lee, W., 1923, *Reconnaissance Geological Report of the Districts of Payap and Maharashtra, Northern
Siam*, Department of State Railways, Bangkok.

- Mae Rim, 1975, อำเภอแม่ริม จังหวัดเชียงใหม่, ประวัติและสภาพท้องถิ่นอำเภอแม่ริม จังหวัดเชียงใหม่, รายงานสภาท้องถิ่นอำเภอแม่ริม จังหวัดเชียงใหม่, พ.ศ. ๒๕๑๘. (チェンマイ県メーリム郡『チェンマイ県メーリム郡の歴史と地方会議』)
- Met, 1966, เมธ รัตนประสิทธิ์, พจนานุกรม ไทยวน-ไทย-อังกฤษ, สงวนลิขสิทธิ์, พ.ศ. ๒๕๐๘. (『タイ・ユアン語-タイ語-英語辞典』)
- 水野浩一, 1965, 「東北部タイの米作農村における農地所有と家族の諸形態」『東南アジア研究』 Vol. 3-2, pp. 7-35.
- , 1968, 「階層構造の分析—タイ国東北部の稲作農村—」『東南アジア研究』 Vol. 6-2, pp. 2-18.
- , 1975, 「稲作農村の社会組織」石井編『タイ国』創文社, pp. 46-82.
- Mizuno, Koichi, 1968, "Multihousehold Compounds in Northeast Thailand," *Asian Survey*, Vol. 8-10, pp. 842-852.
- Moerman, Michael, 1968, *Agricultural Change and Peasant Choice in a Thai Village*, Univ. of California Press.
- 二瓶貞一, 1943, 『仏印・泰・ビルマの農機具』新農林社。
- Notton, Camille, 1926, *Annales du Siam, première partie, Chroniques de Suvarna Khamdeng, Suvarna K'ôm, Khâm, Sihanavati*, Paris.
- Ogawa, Husato, Kyoji Yoda & Tatu Kira, 1961, "A Preliminary Survey on the Vegetation of Thailand," Tatu Kira & Tadao Umesao ed., *Nature and Life in Southeast Asia*, Vol. 1, Fauna and Flora Research Society, Kyoto, pp. 21-157.
- 小川房人, 1974, 『熱帯の生態 I—森林—』生態学講座 30, 共立出版。
- Paritsanā, 1974. ปรีศนา ศิรินาม, ความสัมพันธ์ระหว่างไทยและประเทศราชในหัวเมืองลานนาไทย สมัยรัตนโกสินทร์ตอนต้น, วิทยานิพนธ์ที่เสนอต่อวิทยาลัยวิชาการศึกษา เพื่อเป็นส่วนหนึ่งของการศึกษามหาบัณฑิต, วิทยาลัยวิชาการศึกษา ประสานมิตร, พ.ศ. ๒๕๑๗. (『ラタナコーシン朝初期におけるタイとラーナータイ朝貢国との関係』プラサーンミット教育大学修士論文)
- Pendleton, Robert L., 1963, *Thailand, Aspect of Landscape and Life*, Duell, Sloan and Pearce, New York
- Prachakitčhakōnračhak, 1973, พระยาประชาภิจักรจักร (ชุ่ม บุนนาค), พงศาวดารโยนก อยุ่ยหอสมคแห่งชาติ, พิมพ์ครั้งที่เจ็ด, สำนักพิมพ์คลังวิทยา พระนคร, พ.ศ. ๒๕๑๖. (『国立図書館本ヨーノック年代記』)
- Prakhōng, 1974, ประคอง นิมมานเหมินท์, ลักษณะวรรณกรรมภาคเหนือ, สำนักพิมพ์สมาคมสังคมศาสตร์แห่งประเทศไทย, พ.ศ. ๒๕๑๗. (『北部タイ文学作品の性格』)
- Prānī, 1963, ปราณีย์ ศิริธร ณ พัทลุง (เรียบเรียง), เพ็ชรล้านนา สารคดีชีวประวัติบุคคล ยุคทองของลานนาไทย, พิมพ์ที่สุริวงค์การพิมพ์ เชียงใหม่, พ.ศ. ๒๕๐๖. (『ラーナーの金剛石—ラーナータイ黄金時代の人物評伝—』卷 2)
- Prasoet, 1971, ดร. ประเสริฐ ณ นคร (เรียบเรียงเป็นภาษาปัจจุบัน), มังรายศาสตร์, พิมพ์แจกในงานศพนายหลวงโศทรกิตยานุพัทธ์, พ.ศ. ๒๕๑๔. (プラサート・ナ・ナコーン現代タイ語訳編『マンラーイ法典』)
- Saāt, 1960-1961, สอาด หงษ์ยนต์, "เงิน ๒-เครื่อง," สารานุกรมไทย ฉบับราชบัณฑิตยสถาน,

- เล่ม ๔ ข้อย-คมนาคม, ราชบัณฑิตยสถาน พระนคร, พ.ศ. ๒๕๐๓/๒๕๐๔, หน้า ๒๒๑๙-๒๒๓๙. (『2. 漆器』『翰林院版タイ百科事典』卷4, pp. 2219-2239)
- , 1962, สอาด หงษ์ยนต์, เครื่องเงิน, กรมส่งเสริมอุตสาหกรรม พระนคร, พ.ศ. ๒๕๐๕. (『漆器』)
- Samnangkān Sathiti haeng Chāt, 1968, สำนักงานสถิติแห่งชาติ สำนักงานยกรัฐมนตรี, รายงานผลการสำรวจเนื้อที่และพืชผลการเกษตร พ.ศ. ๒๕๑๑, สำนักงานสถิติแห่งชาติ พระนคร, พ.ศ. ๒๕๑๑. (総理府国家統計局『1968年作付面積・農業生産調査報告』)
- Sanguan, 1965, สงวน โชติสุขรัตน์, ด่านเมืองเหนือ, พิมพ์ครั้งที่ ๓, สำนักพิมพ์โอเดียนสโตร์ พระนคร, พ.ศ. ๒๕๐๘. (『北国史話』第三版)
- , 1969, สงวน โชติสุขรัตน์, ไทยวน-คนเมือง, สำนักพิมพ์โอเดียนสโตร์ พระนคร, พ.ศ. ๒๕๑๒. (『タイ・ユアン族—コン・ムアン』)
- , 1973, สงวน โชติสุขรัตน์, อัครเมือง และ นำเที่ยวเชียงใหม่-ลำพูน, สรุวงศ์ บุ๊คเซนเตอร์ เชียงใหม่, พ.ศ. ๒๕๑๖. (『お国言葉入門およびチェンマイ-ラムプーン案内』)
- Sathian, 1935, เสถียร ลายลักษณ์, ประชุมกฎหมายประจำศก, เล่ม ๑๗, สำนักพิมพ์นิติเวชฯ พระนคร, พ.ศ. ๒๔๗๘, หน้า ๒๙๑-๒๙๔. (『年次別法令集』卷17, pp. 291-294.)
- Sawāt, 1973, สวาท เสนาณรงค์, ภูมิศาสตร์ประเทศไทย, โครงการตำรา สังคมศาสตร์และมนุษยศาสตร์ สมาคมสังคมศาสตร์แห่งประเทศไทย, พ.ศ. ๒๕๑๖. (『タイ国地理学』)
- Sharp, Lauriston, Hazel M. Hauck, Kamol Janlekha & Robert B. Textor, 1953, *Siamese Rice Village, A Preliminary Study of Bang Chan 1948-1949*, Cornell Research Center, Bangkok.
- Smyth, H. Warington, 1898, *Five Years in Siam: from 1891 to 1896*, Vol. 1, London.
- Solheim II, Wilhelm G., 1972, "The 'New Look' of Southeast Asian Prehistory," *Journal of Siam Society*, Vol. 60-1, pp. 1-20.
- Somchit, 1973, สมจิตร พงศ์พจน์, ป่าไม้ไทย, หนังสือชุดความรู้ไทย, องค์การค้ำของครุสภา พระนคร, พ.ศ. ๒๕๑๖. (『タイの森林』)
- Somchit et al., 1971, สมจิตร พงศ์พจน์ และ สุภาพ ภูประเสริฐ, พืชกินได้และพืชมีพิษในป่าเมืองไทย, สาขาครุวิทยาการศาสตร์ สมาคมวิทยาศาสตร์แห่งประเทศไทย พระนคร, พ.ศ. ๒๕๑๔. (『タイ国森林中の食用植物と有毒植物』)
- Sommāi, 1974-1975, สมหมาย เปรมจิตต์, ประมวลรายชื่อคัมภีร์โบราณและสมุคข์อย ในเขตอำเภอเมือง จังหวัดเชียงใหม่ ภาค ๑, ภาค ๒, ภาค ๓, ภาค ๔, ภาควิชาสังคมวิทยาและมานุษยวิทยา คณะสังคมศาสตร์ มหาวิทยาลัยเชียงใหม่, พ.ศ. ๒๕๑๗-๒๕๑๘. (『チェンマイ県チェンマイ市郡内唄多羅葉・横型折本典籍目録』卷1, 卷2, 卷3,

- 卷 4, チェンマイ大学社会科学部社会学・人類学科刊)
 ———, 1975a, สมหมาย เปรมจิตต์ (แปล), มังรายศาสตร์, ภาควิชาประวัติศาสตร์ ลำดับที่ ๑, ภาควิชาสังคมวิทยาและมานุษยวิทยา คณะสังคมศาสตร์ มหาวิทยาลัยเชียงใหม่, พ.ศ. ๒๕๑๘. (ソムマイ・プレームチット訳『マンライ法典』翻訳シリーズ1)
- , 1975b, สมหมาย เปรมจิตต์ (แปล), กฎหมายลานนา, ภาควิชาประวัติศาสตร์ ลำดับที่ ๒, ภาควิชาสังคมวิทยาและมานุษยวิทยา คณะสังคมศาสตร์ มหาวิทยาลัยเชียงใหม่, พ.ศ. ๒๕๑๘. (ソムマイ・プレームチット訳『ラーナー法』翻訳シリーズ2)
- , 1975c, สมหมาย เปรมจิตต์ (แปล), กฎหมายลานนา, ภาควิชาประวัติศาสตร์ ลำดับที่ ๓, ภาควิชาสังคมวิทยาและมานุษยวิทยา คณะสังคมศาสตร์ มหาวิทยาลัยเชียงใหม่, พ.ศ. ๒๕๑๘. (ソムマイ・プレームチット訳『ラーナー法』翻訳シリーズ3)
- 杉山晃一, 1976, 「祖霊祭祀と死者供養—北部タイの一水田農村における事例研究—」『東北大学日本文化研究所研究報告』第12集, pp. 101-139.
- Suthēp, 1970, สุเทพ สุนทรเกษม (บรรณาธิการ), สังคมและวัฒนธรรมลานนาไทย รวมผลงานวิจัยทางสังคมศาสตร์ในภาคเหนือของประเทศไทย, คณะสังคมศาสตร์ มหาวิทยาลัยเชียงใหม่, พ.ศ. ๒๕๑๓. (『ラーナータイの社会と文化—タイ国北部地方における社会科学的調査論文集—』チェンマイ大学社会科学部刊)
- Swearer, Donald K., 1974, "Myth, Legend and History in the Northern Thai Chronicles," *Journal of Siam Society*, Vol. 62-1, pp. 67-88.
- 高谷好一, 1975, 「地形と稲作」石井編『タイ国』創文社, pp. 215-239.
- Takaya, Yoshikazu, 1971, "Physiography of Rice Land in the Chao Phraya Basin of Thailand," *Tonan Ajia Kenkyu (Southeast Asian Studies)*, Vol. 9-3, pp. 375-396.
- Takaya, Yoshikazu & Eiji Matsumoto, 1974, "'Fai' and 'Bo' Type Rice Culture on the Marginal Plain of Thailand," *Tonan Ajia Kenkyu (Southeast Asian Studies)*, Vol. 11-4, pp. 507-511.
- 玉城 哲, 1976, 『風土の経済学—西欧モデルを超えて』新評論。
- Tamnān Phūnmūang Chiangmai, 1971, ตำนานพื้นเมืองเชียงใหม่ จากต้นฉบับโบราณอักษรไทย ยวน, คณะกรรมการจัดพิมพ์เอกสารทางประวัติศาสตร์ สำนักนายกรัฐมนตรี, พระนคร, พ.ศ. ๒๕๑๔. (『タイ・ユアン語唄多羅葉本チェンマイ地方年代記(現代タイ語訳)』総理府歴史資料刊行委員会刊)
- Tamnān Singhanawat, 1969, "ตำนานสิงหนวัติกุมาร, พงศาวดารเมืองเงินยางเชียงแสน, ประชุมพงศาวดาร ภาคที่ ๖๑," ประชุมพงศาวดาร, องค์การคำของครูสภา พระนคร, เล่ม ๓๓, พ.ศ. ๒๕๑๒. (『史料集成卷61所収, グーンヤーン・チェンセン年代記中シンハナワット皇子年代記』『史料集成』クルサパー版卷33)
- 田邊繁治, 1972, 「タイにおける国家領域の成立過程—チャクリ改革期を中心として—」『史料』Vol. 55-6, pp. 33-73.
- , 1973, 「雲南シブ・ソン・パンナーの統治形態に関する一考察—ルウ族の政治組織・土地制度を中心に—」『季刊人類学』Vol. 4-1, pp. 131-165.
- , 1976, 「北部タイの水利形態に関する考察」『今西錦司博士古稀記念論文集』第3巻, 中央公論社(近刊)。

- Tanabe, Shigeharu, 1975, “การชลประทานเพื่อการเกษตร ในประวัติศาสตร์เศรษฐกิจไทย,”
วารสารธรรมศาสตร์, ปีที่ ๕ เล่มที่ ๒, มหาวิทยาลัยธรรมศาสตร์, พ.ศ. ๒๕๑๘,
หน้า ๗๐-๘๔. (「タイ経済史上における灌漑農業」『タマサート大学紀要』Vol. 5-2,
pp. 70-94.)
- Tej Bunnag, 1968, *The Provincial Administration of Siam from 1892 to 1915: A Study of the Creation, the Growth, the Achievements, and the Implications for Modern Siam, of the Ministry of the Interior under Prince Damrong Rachanuphap* (Ph. D. Dissertation, Oxford University).
- Thammarāchānuwat, 1971, พระธรรมราชา นวัตกรรม, หลักภาษาไทย พายัพ, ราชบัณฑิตยสถาน
จัดพิมพ์ขึ้น โดยความร่วมมือของมูลนิธิเอเชีย พระสังหการพิมพ์ เชียงใหม่, พ.ศ.
๒๕๑๔. (『西北部タイ語基礎』)
- 友杉 孝, 1969, 「ムンバン=サンカプトングー北部タイの米作農村」大野盛雄編『アジアの
農村』東京大学出版会, pp. 119-191.
- , 1976, 「タイの灌漑農業」福田仁志編『アジアの灌漑農業—その歴史と論理—』
アジア経済研究所, pp. 118-152.
- Turton, Andrew, 1972, “Matrilinal Descent Groups and Spirit Cults of the Thai-Yuan in
Northern Thailand,” *Journal of Siam Society*, Vol. 60-2, pp. 217-256.
- 渡部忠世, 1964, 「タイ国の水稻栽培技術について」『東南アジア研究』Vol. 2-1, pp. 25-42.
- , 1970, 「タイにおける「モチ稲栽培圏」の成立—栽培稲の変遷過程からの考察—」
『季刊人類学』Vol. 1-2, pp. 31-54.
- , 1975a, 「稲作の展開」石井編『タイ国』創文社, pp. 3-15.
- , 1975b, 「アジア栽培稲の伝播—アッサム・雲南起源説から—」『季刊どるめん』
Vol. 7, pp. 14-27.
- WATABE, Tadayo, 1967, *Glutinous Rice in Northern Thailand, Reports on Research in Southeast
Asia Natural Science Series N-2, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto
University.*
- Wijeyewardene, Gehan, 1965, “A Note on Irrigation and Agriculture in a North Thai Village,”
*Felicitation Volumes of Southeast-Asian Studies Presented to His Highness Prince Dhaninivat
Kromamun Bidyalabh Bridhyakorn*, Vol. 2, The Siam Society, Bangkok, pp. 255-259.
- , 1967, “Some Aspects of Rural Life in Thailand,” T. H. Silcock ed., *Thailand,
Social and Economic Studies in Development*, Australian National Univ. Press, Canberra,
pp. 65-83.
- , 1968a, “The Language of Courtship in Chiangmai,” *Journal of Siam Society*,
Vol. 56-1, pp. 21-32.
- , 1968b, “Address, Abuse and Animal Categories in Northern Thailand,” *Man*,
new series, Vol. 3-1, pp. 76-93.
- , 1973, “Hydraulic Society in Contemporary Thailand?” Robert Ho & E. C.
Chapman ed., *Studies of Contemporary Thailand*, Research School of Pacific Studies,
Australian National University, Canberra, pp. 89-110.
- Winit, 1960, พระยาวิจิตรวินนทร (วินิจ โต โกเมศ), ชื่อพรรณไม้แห่งประเทศไทย ฉบับชื่อ
พื้นเมือง-ชื่อพฤกษศาสตร์, กรมป่าไม้ พระนคร, พ.ศ. ๒๕๐๓. (『地方名一学名版
タイ国植物名』)
- 八幡一郎, 1965, 「インドシナ半島諸民族の物質文化にみる印度要素と中国要素」松本信広編
『インドシナ研究—東南アジア稲作民族文化総合調査報告(一)—』有隣堂出版, pp.
161-220.
- Zimmerman, Carle C., 1931, *Siam, Rural Economic Survey 1930-1931*, The Bangkok Times Press,
Bangkok.